

# Ruhe (ルーエ やすらぎ)

Juli 2005

12

The Naruto German House

発行日 2005年7月28日  
発行 鳴門市ドイツ館  
〒779-0225  
鳴門市大麻町桧字東山田55-2  
TEL:088 689 0099 FAX:088 689 0909  
URL: <http://www.city.naruto.1g.jp/germanhouse/>  
e-mail: [doitukan@city.naruto.1g.jp](mailto:doitukan@city.naruto.1g.jp)

## ニーダーザクセン州ヴルフ首相ドイツ館を訪問

第24回「第九」コンサートの6月5日を中心に、姉妹都市のリューネブルク市が所属するニーダーザクセン州のヴルフ首相一行が来鳴されました。ドイツでは州ごとの独自性が強く、それぞれに政府をもっているため、州の代表は首相と呼ばれています。今回は財界人や報道関係者を含む25名もの方々が来られ、慌ただしい日程ではありましたが、初夏の鳴門を楽しんで帰られました。その様子を、終始お世話願った国際交流員のヒルシュフェルドさんにまとめてもらいました。

### ヴルフ州首相を迎えて

交流員 マティアス・ヒルシュフェルド

今回のヴルフ州首相らの鳴門訪問に際しましては、私が直接のお世話をさせていただきました。一行は、州官房の代表や州内の企業の社長、報道陣からなる25名でした。

ドイツ、特にハノーファーの州政府との連絡のほか、バスの看板から名札まで、ドイツ語が必要なすべての準備に参加しましたが、使節団が来られるまでは緊張の連続でした。ようやく6月4日に新神戸駅で首相一行を出迎え、市が用意した「ベートーヴェンバス」に乗っていただきホッとしました。



それからの24時間は、鳴門市にとってはも

ちろん、ドイツからの使節団にとっても大変な経験だったと思います。4日朝にドイツから到着したばかりなのに、その夜の船上での歓迎会でも、みなさんはとても快活に過ごされました。ヴルフ首相は、特にお元気そうでした。翌5日は、午前中は渦潮と大塚国際美術館の見学、慰霊碑での献花、午後は「第九」演奏会と財界人との懇親会と、厳しいスケジュールの積み重ねでした。



それらの合い間を縫って、ドイツ館で2つの大事な行事が開かれました。

ドイツ館へとヴルフ首相らが階段を登って来られたとき、広場で阿波踊りの音楽が響き始めました。微笑みをたたえたヴルフ首相と亀井市長に、たくさんのカメラが向けられました。先に着かされていたツェプターEU（欧州連合）大使と並んで、たくさん





の鳴門市民が歓迎の輪を作りました。旗や横断幕で飾られた館内も大賑いで、一行は人波をかき分けようやく正面に立ちました。首相と市長の挨拶に続いて、ニーダーザクセン州の学生が描いた絵を集めたカレンダーについての、地元の小中学生の感想文が首相に渡されました。

今回の行事のクライマックスは、リニューアルされた「ニーダーザクセン州展示コーナー」と、「グリム童話イラスト展」の開会式でした。白い手袋をはいた5人によって、テープがカットされました。州政府と鳴門市の協力のできた美しい展示に、首相やブ

ラウンシュヴァイク市長などがいろいろ説明を加えてくれました。

グリム童話のイラスト展を回り、大ホールのドイツ年垂れ幕に飾られたステージで集団撮影をしました。その後短時間でしたが、2階の俘虜関係の展示も見学しました。

昼食の場でもいろいろな話が交わされましたが、一番感動したのはTUI 旅行会社のホーマン社長の言葉でした。お祖父さんが板東の俘虜の一人で、「ゲーバ」というケーキ屋さんを開いていたそうです。こちらにない写真の詰まった珍しいアルバムをお持ち

ち下さり、2枚の絵葉書を寄贈して下さいました。こうした貴重な資料を通して、経済など実務的な意見交換ばかりでなく、深く歴史に根を下ろした交流ができました。ヴルフ首相をはじめ使節団のみなさんは、ドイツ館訪問に強い印象をもたれたようでした。またの来館を、お待ちしております。



## 「ドイツ年」関連情報

4月から、「日本におけるドイツ年」が幕を開けました。関西でも3月初めの「ドレスデン国立美術館展」を皮切りに、7月9日からは神戸市立博物館で「ベルリンの至宝展」が始まります。板東収容所に関連する行事もいくつか企画されていますが、今回は何度か鳴門にも取材に来られたドイツ-日本研究所のフラッヘさんに寄稿をお願いしました。

「ドイツ年」を記念した今年の「第九」コンサートには、4人のドイツ人女性が参加しました。フラッヘさんもその一人です。コンサートに先立つセレモニーでは、ヴルフ首相に続き挨拶されたツェプターEU大使は、「EUの歌」が「歓喜の歌」となったことの意味を強調されました。また大使夫人は、フルート奏者として演奏にも参加されました。

神戸日独協会でのヒルシュフェルド国際交流員の板東収容所についての講演がきっかけで、4月末に関西大学文学部で田村

館長の学術講演会が実現しました。100人以上の教員・学生が熱心に耳を傾けてくださり、いっそうのドイツ館PRの必要を痛感しました。お世話願った八亀徳也教授にも、板東とのかかわりを書いていただきました。

もちろん、ドイツ館での行事も盛んです。先にふれましたとおり、ヴルフ首相などがリニューアルオープンを祝ってくださった「ニーダーザクセン・コーナー」は、ほぼ2倍に広がり、ゆったりコーヒーやビールを楽しめるようになりました。同時にオープンした「グリム童話イラスト原画展」は、「白雪姫」や「赤頭巾ちゃん」などの馴染みのキャラクターは見られませんが、「勇敢なちびの仕立て屋さん」や「ブレーメンの音楽隊」などの彩り豊かな絵は、子どもさんにも好評でした。

そのほか、いくつかのドイツの歌を味わうコンサートも開かれました。ワインやビールも好評で、100種ものワインを集めた5月3、4日の「ワイン祭り」には、県外をふくめ2千人が訪れました。「第九」に合わせて、今年もモーゼルワインの本場か

ら協会の会長やワインの女王が来られ、豪華な「試飲」を楽しめました。

なお市内の鳴門高校でも、リュネブルクの姉妹校ラーベ校との交流をふまえて、「鳴校でのドイツ年」と題した講演会が開かれ、館長とヒルシュフェルドがドイツ人気質やドイツの学生生活について話をしました。



挨拶するツェプターEU大使

## 「日本におけるドイツ年2005/2006」協賛 「DIJドイツ-日本研究所の板東コレクション・ヴァーチャル展覧会」 (<http://bando.dijtokyo.org>) 2005年10月26日公開

ドイツ日本研究所主任司書 ウルズラ・フラッヘ

東京にあるドイツ-日本研究所（DIJ）図書室には第1次世界大戦の在日ドイツ兵俘虜収容所に関する資料が所蔵されています。ことに板東俘虜収容所で作られた刊行物がいちばん多く、「板東コレクション」と名付けられています。そこには、収容所新聞「ディ・バラック」と「日刊電報通信」、演奏プログラム、演劇プログラム、地図、講義のテキスト、葉書、写真などが含まれています。

今年4月に始まった「日本におけるドイツ年2005/2006」を

機に、「板東コレクション」を初めて一般に公開することにしました。板東俘虜収容所が独日関係にとって大事な役割を果たしたことは鳴門市ドイツ館館報の "Ruhe" をお読みになっている方々はよくご承知でしょう。詳しい経緯は省きますが、このテーマをもっと知ってもらいたく、「板東コレクション」をインターネット上のヴァーチャル展覧会として紹介することにしました。オープニングの催しは、ドイツ東洋文化研究協会（OAG）主催の展示会「在日ドイツ兵俘虜1914-1920」と併せて、2005年10月26日に東京ドイツ文化会館で行います。

ヴァーチャル展覧会の準備中は、鳴門市ドイツ館に大変お世話になりました。数多くの質問や勝手なお願いにも快く応じて下さり、感謝にたえません。特に当図書室所蔵写真のモチーフの鑑定に際しましては、多大なご尽力をを賜りました。

さて、ヴァーチャル展覧会の内容を紹介致しましょう。ヴァーチャル・ツアーではバラック(兵舎)、レストラン、商店街の「タアパオタオ」など、収容所全体の散歩ができます。俘虜たちがどういう風に不自由な時間を意味ある生活に変えたのかを、幾つかのテーマに分けて説明します。例えば「飲食物」を巡るページでは、収容所内で入手できたバラエティーに富んだ料理と飲み物を紹介します。収容所劇場での活動は「劇」についてのページに反映されています。「日本人との交流」では、1918年に俘虜たちが開いた「美術工芸展覧会」などの資料を取り上げています。

さらに、キーワード・姓名・分類などの検索、フリーテキスト検索、それとブラウズ可能のデータベースもご利用になれます。史料は高品質デジタル画像で、データベース上でも閲覧が可能です。展覧会とデータベースは、日本語とドイツ語でご覧になれます。みなさまの <http://bando.dijtokyo.org> への「ご来場」をお待ちしています。



## 多彩だった板東収容所での「演劇」活動

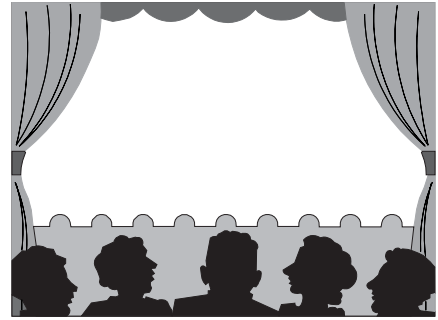
関西大学教授 八亀 徳也

大阪に「朝日大学」という一風変わった団体がある。岐阜県にも同名の大学があるが、こちらはれっきとした4年制の大学である。一方、大阪の「朝日大学」が変わっているというのは、これがドイツの古い大学町に多く見られるVerbindung（フェアビンドゥング＝学友会）に倣って作られた日本で唯一の組織であり、月1回の例会の原則では、公のことはドイツ語を使い、ドイツの歌を歌い、ビールを飲みながら歓談することになっているという点である。

先日の例会で、ある年配のメンバーが、「大阪外国語学校（現大阪外国語大学）時代、ヘルマン・ボナー先生から、シラーの戯曲『群盗』を皆で上演したときに教わった主題歌だ」と言って一曲歌われた。それは、ラテン語によるドイツの有名な学生歌〈Gaudeamus igitur〉の歌詞をドイツ語に変えたものであったが、そのときはたと思い出したのが、田村ドイツ館館長の著になる『どこにしようと、ここがドイツだ』の中の記述である。すなわち、ボナー氏は板東で俘虜生活を送られ、後に大阪外語と大阪外大で教鞭を執られ（75ページ参照）、また、1917年7月10日には収容所でシラーの『群盗』が上演されているのである（45ページ参照）。想像を逞しくすれば切りがないが、「もともとは青島で教師をして」おられたというボナー氏が、すでに板東での『群盗』上演に関与しておられたとしても少しも不思議ではない。

それにしても、本書45ページの上演題目一覧を見て、ドイツ文学の珠玉の名作が綺羅星のようにズラリと並んでいるのには恐れ入ってしまう。時代順に見ると、16世紀の工匠歌の名人、ハンス・ザックスに始まり、17世紀バロック時代のグリューフィウスが取り上げられ、18世紀から19世紀初頭にかけては当然ながら、レッシング、ゲーテ、シラー、クライスト等の主要作品が扱われ、比較的新しいものでは、戦前の日本で愛読され上演もされたマイヤー・フェルスターのメロドラマ『アルト・ハイデルベルク』もある。さらには、シェイクスピア、カルデロン、イプセンらの外国の古典作品も見落とせない。これらの作品の台本を作り、演出をした中心人物の力量もさりながら、登場人物として台詞をマスターした俘虜たちの熱意と努力には感服するほかはない。上掲書、前ページの演奏曲目一覧でも明

らかな通り、こういう文化活動を成し得たこと自体、彼らの教養の高さを雄弁に物語る。このように、収容所での演劇活動一つを取り上げても、かつて板東に花開いたドイツ文化の一端がうかがえるというものであろう。



## 今後の主な催し

これからも、9月28日の「ドレスデン吹奏楽団演奏会」などのコンサートや、11月の新史料でハンゼンと徳島オーケストラのかかわりを探る特別展など、さまざまな催しが目白押しです。ことに注目される2つの行事を紹介しておきましょう。

一つは、10月1日に開かれる「全国フォーラムドイツ兵俘虜収容所を考える」です。丸亀の方々のご努力による「メール会報」はすでに140回を越え、全国誌『青島戦ドイツ俘虜収容所研究』も今秋で3号になります。それ以外にも、各地で地道な研究を重ねておられる方は数知れません。これらの仲間を一堂に集め、率直な意見交換を交流をめざしております。なお会終了後の懇親会で、習志野の史料などをもとに復元された、「板東風」ドイツ・ソーセージの試作品が披露されます。こちらも、楽しみにしてください。なおこのソーセージは、10月末の「ドイツフェスト」でも味わえます。

もう一つは、10月23日に開かれる「ルートヴィヒ2世とその城、そしてワーグナー」とうスライド講演会です。バイエルン王ルートヴィヒ2世はワーグナーに入れあげたり、ノイシュヴァンシュタインなどのお城を作ったことでも知られていますが、「狂王」とも言われ「禁治産者」扱いもされています。その実態をマルコス・シュパンゲンベルクさんが、興味深く解き明かしてくれます。前日の22日にはこの講演にちなんで、徳島のプリンスホテルで、「バイエルン宮廷料理」を味わう会も予定されています。こちらもお楽しみください。

## 板東俘虜収容所をテーマに映画化が決定

副館長 中野 正司

板東俘虜収容所のドイツ兵俘虜と地元の人々との交流を描いた映画が製作されることが決まりました。去る6月10日に徳島プリンスホテルで、企画発表会が開催され、その席上、東映株式会社の岡田裕介社長と株式会社シナノ企画の宮川昕也社長から、監督は『きけ、わだつみの声』の出目昌伸氏、脚本は古田求氏を起用し、2006年6月のワールドカップ開幕時を目標に上映することが発表されました。

映画のタイトルは『バルトの楽園』。「バルト」とはドイツ語でヒゲの意味があり、板東収容所の所長であった松江豊寿大佐の立派なヒゲと、ヒゲを生やしたドイツ兵俘虜が多かったことを併せた意味で、「楽園」は、この収容所が俘虜たちの楽園であったこと、ベートーヴェンの「第九交響曲」をはじめとした様々なコンサートが演奏されたことからあえて「がくえん」と読ませたとのことです。

映画は、青島戦争の後、厳しい環境にあった久留米収容所の俘虜たちが板東へ移るところからはじまり、松江所長らのヒューマニズムあふれる取扱いや、地元の人たちとのあたたかいもてなしのお陰で、交流が徐々に深まり、最後に地元の人々を招待しての「第九」の演奏会で締めくくられるというストー

リーです。

この映画は、今年の『北の零年』『男たちの大和』に続く大作で、当館近くに、収容所のバラックなど、当時のものの3/4位の建物を復元するという大規模なロケセットの建築を計画しています。

また映画の製作に当たっては、全国的に情報発信できる素晴らしい機会だとして、徳島県と鳴門市も全面的に支援をすることになりました。その一環として、撮影等に地元での支援を行うため、先述の企画発表の一週間前に県内の有志で「バルトの楽園・誘致支援委員会」が結成され、鳴門市でも7月8日に「バルトの楽園・鳴門ロケサポート協議会」が結成されました。これらの組織は、映画撮影時のエキストラの募集や、出演者やスタッフへの炊き出しなど様々な支援の他に、ロケセット跡地の有効利用なども計画するそうです。

これからキャスティングが決定され、11月頃には当地でロケ撮影も開始されるとのことですので、その時期には、是非とも見学にお越しください。



『バルトの楽園』のロケセット

## 「登録有形文化財」のプレートが届く

鳴門市はかねてから、板東収容所ゆかりの建築物の「文化財」登録を申請しておりました。安芸宅と柿本宅の2棟の「旧バラック」と、「船本牧舎」の3件です。お伝えしましたように昨年暮れに文化庁から決定の通知がありましたが、この5月によ

うやく、銅製の「登録有形文化財」のプレートが届きました。



## 阿波銀行学術・文化振興財団 から10万円助成

『徳島新報』の翻訳・刊行を企画しております「ドイツ館史料研究会」は、その一助として本年度の阿波銀行の「文化活動助成」に応募してみました。60件以上の申請があったようですが、幸い10件の内に入り10万円の助成を受けることができました。ただこの額ではかなり限定したものしか出せませんので、面白そうな箇所をピックアップした「ダイジェスト版」にでもしようかと検討中です。

### 『ディ・バラック 第3巻』刊行

これまで鳴門市が手がけてきました、『ディ・バラック』の「第3巻」が刊行されました。1918年11月の「休戦」を挟む時期だけに、興味深い記事が満載です。ぜひ、お読み下さい。

定価 3,000円  
送料 340円

## 最近の刊行物から

香川 宜子 (かがわ よしこ)

『アヴェ・マリアと梵天の子ども達』

(新風舎、2005、税込1260円)

香川さんは、徳島の国府町で病院を開いておられるお医者さんです。今年の3月、「アウシュヴィッツ解放60周年記念作品」としてこの本を出されました。「アヴェ・マリア」と名付けられたヴァイオリンの由来をたどる中で、心ならずもアウシュヴィッツで演奏を強いられた少女に行き着きます。その少女を救おうとして、みずからも収容所で命を落とすドイツ人指揮者など、悲惨な状況下での人と音楽とのかかわりが、感動的に描かれています。ミュージアム・ショップで販売しています。

Mattias Hirschfeld: Beethoven in Japan. Zur Einführung und Verbreitung westlicher Musik in der japanischen Gesellschaft (von Bockel Verlag, 2005, Euro 35) (マティアス・ヒルシュフェルド 「日本におけるヴェートーヴェン：日本社会における西洋音楽の導入と普及」(フォン・ボッケル社 (ハンブルク)、2005年、35ユーロ)

ドイツ館で国際交流員として活躍している、ヒルシュフェルド氏の処女作です。ドイツ語がお得意か、挑戦してみたい方はぜひご一読ください。

### 👁️ 編集後記

「館報 第12号」をお届けします。今回は、ニーダーザクセンのヴルフ首相の来館をはじめ、「日本におけるドイツ年」関連の報告を中心にしました。記事を書いていて気づいたのですが、石井町の「ウイーンナークラブ」さんらによる収容所でのドイツ・ソーセージの復元や、徳島プリンスホテルでの俘虜の食事やバイエルン宮廷料理の復元は、いかにも「ドイツ年」にふさわしい貴重な試みです。次号には、ぜひその苦労話などをお寄せいただこうと考えております。(田村)